

Title	コラム フェミニズムとわたし
Author(s)	しらゆき
Citation	フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想. 2022, p. 40-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88597
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フェミニズムとわたし

しらゆき

牟田和恵 編 フェミニズム・ジェンダー研究の挑戦：オルタナティブな社会の構想 コラム

ISBN 978-4-87974-779-2 C3836

フェミニズムとわたし

し ら ゆ き

・はじめに

とある田舎にて地元を出ることなく、地方女子の王道コース、実家から通える国立大学教育学部に入ったわたしは、ひょんなことから社会学、フェミニズムに出会ってしまいました。自分が幼いころから抱えていた女性としての不安や不満が、自分の性のせいではなく「社会の構造」にあるのだと知った時の衝撃は今でも忘れられません。今でもその知的興奮を鮮明に思い出すことができます。地元でそのまま教員になり、そこでずっと生きていくことしか考えられなかった人生が一変してしまいました。どうしても社会学、フェミニズムを修めたいという思いで、地元を出て牟田ゼミの門を叩いたのです。

本エッセイは、大学院後期博士課程でフェミニズムを修めたけど、アカデミアには残らずに（残れずに）別の道を生きることになった筆者が、牟田ゼミで学んだフェミニズムをどのように「生きる力」に変えて生きてきたか、を紹介します。この世の中には、博士課程を出て博士号を取ったものの正規の研究職を得ることができなかった人々がその後たどる「悲惨な運命」について書かれている本や記事がたくさんあります。それらによるとこの世の中、博士号を取ったとしてもいばらの道。ならば筆者は博士課程にダラダラ居続けたうえに、博士号を取れずに満期退学しているのだから、それらの本や記事がいう「悲惨な運命」よりもさらに悲惨な人生が待ち構えているはずでした。しかしわたしの中に刻み込まれたフェミニズムは、わたしが敗北者として野垂れ死ぬことを許してはくれなかったようなのです。

・結婚とわたし

フェミニズムを研究していたフェミニストである筆者は、結婚について夢も希望も持ち合わせていません。結婚といえば「婚姻制度」であり、不平等な家父長制を存続させる社会装置です。愛だの恋だの言っていると、「ロマンチックラブ・イデオロギーに支配された関係性」という言葉が脳をよぎります。さらに言うと、婚姻制度には夫婦別姓や同性婚などの世間を賑わす問題が山積みです。わたしはフェミニストとして、結婚にたいして自身はどのような立場をとるべきか、常に自分へ問い葛藤してきました。そしてわたしが出した答え、それは生き延びるために婚姻制度を「利用する」というものでした。

わたしの結婚は、少しユニークだったかもしれません。相手は、趣味嗜好が合わないどころか正反対だけど、生きていくための「利害がたまたま一致した」異性の方です。この方が異性であったのは、制度を利用できたという意味でラッキーでした。結婚を決めた時、わたしは病気療養中の無職、彼は正規雇用の公務員でした。彼と法律婚をして夫婦になれば、自分は毎日寝ているだけで「扶養手当」というお金を手にすることができました。また彼はわたしと結婚したことにより所得から配偶者控除を差し引くことができ、節税することができました。さらにわたしは、健康保険や厚生年金の被扶養者になることができ、国民年金や国民健康保険の重い保険料負担からも逃れることができました。お互い、生きていくだけでかかってくる家賃や食費などの負担も軽減されました。これらの結婚の「特典」は、当時病気を抱えていたわたしが生き延びるためには十分でした。わたしはフェミニストとして現行の婚姻制度に異議を唱えたい、という気持ちがありました。

ですから、この制度を利用することに葛藤がなかったわけではありません。しかしわたしは、主義主張や理論よりも、自身が日々穏やかに「生き延びる」ことの方が重要だと思い、制度を「利用」することにしました。わたしはこのように結婚の特典を余さず享受しながらも、このような特典は、結婚しない/できない方々を排除しているからこそ成り立っているのだという現実を忘れたことはありません。自分はフェミニストであり、結婚という制度の構造をよく理解していたからこそ、それを余すことなく「利用」することが可能であったのです。どうか、この制度が結婚しない/できない方々を包摂するものになっていくことを願っています。最終的にはこの制度がなくても、すべての人々が安心して暮らせる社会になりますように。

・夫婦別姓とわたし

結婚を決意し婚姻届けを提出する段階になって、フェミニストが最も葛藤するのが「苗字」の問題なのではないでしょうか。現行の日本の制度では夫婦別姓が認められておらず、どちらかの姓をどちらかに変更することが求められています。そして慣習として多くの女性が男性側の苗字に変えているという現実があります。わたしもフェミニストの端くれとして、結婚後の苗字をどうするかは重要な問題でした。婚姻制度を「利用する」とはいても、ここだけはそう割り切れない何かがあったのです。

結婚するという話になったとき、意を決して現在の配偶者に「苗字どうする？私は変えたくないのだけど。」と尋ねてみました。彼は「え？」と一瞬驚いたあと、「じゃあ自分を変えるわ」と一瞬ですんなり決着がつかれました。「良いの？」と尋ねたら「自分の苗字に愛着はあったけど、執着はないから」という答えでした。

あれから6年、配偶者はわたしの苗字を使い続けています。このエッセイを書くにあたって、「何か不便なことはないのか？」「昔の苗字に戻りたいと思ったことはあるか？」とインタビューしてみました。その答えは「一切ない。」だそうです。たとえ離婚したとしても、昔の苗字には戻さないし、たとえ夫婦別姓選択制が認められたとしても、昔の苗字には戻さないそうです。理由はめんどくさいから、今の苗字で不便だと思いが一切ないから、だそうです。彼にとって苗字とは、自分の本質を一切変えないものであり、自動的に勝手に与えられた記号です。彼にとって大切なのは苗字や思想ではなく、結婚をして「生活」すること、「生き延びる」ことであり、外からどう見られるかには関心がありません。

インタビューをする前は、「不便なことがたくさんある」「早く夫婦別姓選択制が認められてほしい！」というようなありがちなデータをいただけたと思っていたのですが、意外や意外、困っていることは一切ないし、夫婦別姓選択制にも一切興味がないそうです。あまりにも拍子抜けした私は、「でも結婚した時は、免許の書き換えなど大変で不便だったでしょう？」と誘導尋問してみました。しかしその答えもNO。「結婚の手続きの延長だったから手間はかかったけど大変で不便だとは思わなかった。行政の手続きはどのような手続きでも手間はかかる。ただそれだけ。」と取りつく島もありませんでした。「たかが苗字」変えても変えなくても、自分自身は一切変わらない、というお話でした。

これまで、夫婦別姓選択制を求めてきた女性たちは「たかが苗字」のためにたたかってきたのでしょうか。違います。家制度をたてにした理不尽で不平等な扱い、それが婚姻時の「苗字」に象徴されているからこそ、たたかってきたのです。たかが苗字のためのたたかいではないのです。反対している人々はそれが分かっているからこそ、徹底して反対しているのです。

わたしの配偶者の「たかが苗字」だという無邪気な問いかけは、女性たちが本当は「何」を求めてたたかってきたのかを浮き彫りにさせるのでした。

・起業とわたし

婚姻制度を「利用」してぬくぬくと特典を享受していた日々は突然、終焉を迎えました。お堅い仕事の代名詞「公務員」としてバリバリ働いていた配偶者ですが、上司のパワハラを受けたことが原因で体調を崩し、仕事を退職することになってしまいました。制度によって幾重にも守られた公務員の「妻」として、三食昼寝+犬3匹つきの人生史上最もゆるい生活を送っていた自分に突然降りかかってきた大ピンチ！でも絶望してはいられない！結婚した時は自分が病気療養中だったのですが、それが一転。無職かつ病気の配偶者と犬3匹を抱える一家の大黒柱にならざるを得なくなってしまいました。人生は何があるか分かりません。

さて、自分と配偶者、そして犬3匹を養うために、自分はどんな仕事をすれば良いか、絶体絶命のわたしは三日三晩考えました。配偶者は職場で突然理不尽なパワハラを受けたにもかかわらず、組織は彼を守ってくれなかったばかりか、自ら退職するように仕向けられ我々は辛酸を舐めました。その経験があったのでお互い、もう二度と組織に雇われる生活はできないなと思いました。三日三晩悩んだ挙句、「雇われることができないのであれば、『起業』するしかない！犬たちを守るために起業するぞ！」と一発奮起。犬たちを守るための起業ですから、犬のための仕事ができれば良いな、と思いました。

起業を決意した時、一番最初に書くよう促されたのが「事業計画書」でした。これは、事業の概要や自己紹介、マーケティング戦略や市場動向、売り上げ予想やその根拠などを書いたものです。これをもとに融資を相談したり補助金を申請したりします。起業を希望する多くの人はずこの「事業計画書」を書くのに苦労すると聞かされていたのですが、なんと自分はスラスラ書いてしまいました。なぜならば院生時代、同じようなフォーマットでこの手のものを書いた経験があったからです。それは奨学金や調査費、学振の申請です。院生時代は奨学金も調査費も学振も全落ちだったのですが、「事業計画書」は大当たり！わたしは無事に新規開業のための補助金をゲットし、まずは低コスト低リスクの「ドッグシッター」を開業しました。ドッグシッターとは、ベビーシッターの犬版です。お留守のお宅にお邪魔して、留守番中の犬の世話や散歩をするお仕事です。その後、次々と補助金を渡り歩き、ドッグシッターに加えて保護犬カフェ、動物病院と事業を拡大していきました。現在はそれらをまとめて「ワンワンサービス」と呼び、代表者として、配偶者を含めた従業員2名を雇用しながらのんびり生活しています。もう、職場の人間関係に悩むこともありません。理不尽な上司に従う必要もなく、組織のために自分を犠牲にする必要もありません。

日本政策金融公庫「2017年度新規開業実態調査」によると、起業家のうち女性が占める割合はたった18.4%。起業にチャレンジする女性は男性と比べてまだまだ少ないです。しかしわたしは、自分の経験から女性こそ起業するべきだと思います。ワークライフバランスを、自分自身の手で確立させることができるからです。自分や配偶者の年齢にとらわれることなく働くことが可能ですし、ライフスタイルに合わせて仕事を選んでいくことも可能です。女性の起業をサポートしてくれる補助金の体制も整っています。そして何よりも、この資本主義の世の中は、事業をしている方が雇われているよりも絶対的に有利な仕組みになっています。

わたしは、起業するしか道がなかったので仕方なく、生き延びるために起業したのですが、今では本当に良い転機だったと思っています。いつかわたしは、かつての自分のように起業する以外に道がない女性に、「生き延びるための起業」の方法を伝えていけたらいいなと思っています。

・おわりに

現在わたしは、地元よりもさらに田舎の限界集落に住んでいます。人口は3000人程度の町で、町議会議員は全員男性です。自治会には男性部と女性部があります。葬式があると自治会男性部が仕切り、女性は裏でおにぎりを作っている、そんな地域です。わたしは会ったこともない人の葬式で黒いエプロンを着て、ニコニコしながらおにぎりを握って、お茶を出しています。わたしはこのような不平等に憤慨することもなく、傷つくこともありません。なぜならば、この「おかしさ」や「不平等」を構造的に見ることができるからです。

阪大を退学するまでもしてからも、わたしの人生は順風満帆ではありませんでした。順風満帆ではなかったけれども、知性を力に変えてしなやかに「生き延びる」ことはできました。フェミニズムの学問としての「底力」はそこにあるのだと思います。そしてそれはすべての女性に開かれています。「学問」をリタイアした私にさえ。

たった一人で牟田ゼミの門を叩いたかつてのわたしに祝福を。

しらゆき

「ワンワンサービス」代表。

毎日、たくさんの犬たちと一緒にのんびり暮らしています。